

研究ノート 来たるべき多言語世界における日本語の翻訳発信のために

著者	津城 寛文
雑誌名	国際日本研究
巻	11
ページ	73-88
発行年	2019
URL	http://doi.org/10.15068/00154863

研究ノート

来たるべき多言語世界における日本語の翻訳発信のために
For the Translation and Presentation of the Japanese Language in an Evolving Multilingual World

津城 寛文 (Hirofumi TSUSHIRO)
筑波大学人文社会系 教授

英語が現代世界の国際語となる中、言語の多様性を確保しようとする試みも、各所でなされている。単調な生物世界が生態学的に脆弱であるように、単調な言語世界も言語生態学的に脆弱であるに違いないという直感、また人類にとって言語の多様性が、コミュニケーションを妨げるデメリットではなく、表現の豊かさを広げるメリットであるという実感を、少なからぬ人々が共有しているからである。諸言語が混在する現状を超えて、多様性と交流性が並び立つ将来の言語世界は、多言語的かつ高度に翻訳対応的になるに違いない。

日本語は、世界的に評価の高い文学作品だけでなく、人文社会系の分野でも豊かな「作品」を持ちながら、グローバルな英語化の波に曝され、とくに学術用語としては絶望的であるかのごとき扱いを、各方面で受けつつある。将来的な多言語世界で、日本語も重要な学術用語の一つとしての地位を確保するためには、一方では貴重な言語遺産を核心に保ちつつ、他方では、翻訳に適合的なインターフェイスとしての文体・書式を作るという、両面作戦を展開する必要がある。ここでは後者の課題に重点を置き、先行例を検討しつつ、ここ数年で急速に発展している機械翻訳の活用を含む、いくつかの戦略を考える。最後に、機械翻訳に人文系の対訳データ資料を提供するための、具体的な作業を提案する。

Whereas English is becoming the international language of the contemporary world, counter efforts to secure the diversity of languages can be observed here and there. Not a few people share the intuition that a monolingual world must be fragile just as a monotonous life world is so ecologically; likely the feeling that the diversity of languages is not a demerit which hinders communication, but a merit which amplifies the fertility of expressions. Beyond a world of crowded languages, the forthcoming world must be multilingual and highly translation coping, where diversity and interchange of languages coexist.

The Japanese language has produced not only highly esteemed literary works but also rich 'works' in humanities and social sciences. But it has been exposed to the globalization of English and so often disqualified as academic language. Supposing a multilingual world in the future, however, the Japanese language can occupy a significant status in academism. For this sake, we need operations on two fronts: one is to preserve a unique heritage language in the center, the other is to innovate interfacing styles and formats of Japanese which shall be translation coping. Here I focus on the latter front and consider some operations, including the utilization of machine translation which has made rapid developments recently, with reference to precedent examples. Finally, I propose a concrete procedure to provide sentence-by-sentence translated data to machine translation projects.

キーワード：翻訳、多言語世界、日本語表記、和英混交文、機械翻訳

Keywords: Translation, Multilingual World, Notation of Japanese, Japanese-English Mixed Style, Machine Translation

1. 使用言語をめぐるポリティックス

日本語は、近現代世界の主流言語とのあいだで、「言葉の壁」があまりに高いため、明治以来、さまざまな嘆きが語られてきた。文化的、言語的な敗北感の極致では、日本語を捨てて、国際語を国語に、といった投げやりな主張も、唱えられた。

エスペラントにも関心を寄せる田中克彦は、柳田国男が1920年代、ジュネーブでの国際連盟委任統治委員会に、日本代表として出席したおり、英語やフランス語を自由に話せず、悔しい思いをした、というエピソードをあげている。そのような特定言語の支配に対する不公平感、国際語の理想主義の高まりから、エスペラント運動が世界でも日本でも、最も盛んになっていたのが、第一次世界大戦から国際連盟にかけての時代であり、柳田もエスペラントの勉強をはじめたほどだったという（鈴木、田中、2008）。

そのエスペラントを公用語とする論は、ほとんど話題にならなかったのに対して、時代をさかのぼる明治の森有礼の英語公用語化論、とくに第二次世界大戦直後の志賀直哉のフランス語公用語化論は有名である。志賀は「国語問題」（1946）において、「此際、日本は思ひ切つて世界中で一番いい言語、一番美しい言語をとつて、その儘、国語に採用してはどうか……フランスは文化の進んだ国であり、小説を読んで見ても何か日本人と通ずるものがあると思はれるし、フランスの詩には和歌俳句等の境地と共通するものがあると云はれてゐるし、文人達によつて或る時、整理された言葉だともいふし、さういふ意味で、フランス語が一番よささうな気がする」と述べた（志賀、1974）。

「小説の神様」と呼ばれた志賀の、60歳代でのこのナイーブな言語観について、田中克彦は「母語への絶望というよりも……日本語ではやれないことがフランス語ではやれるかもしれないという、未知の、あるいは十分には知らない言語への期待……要求の大きさに胸を突かれる」と述べている（田中、1989）。国際語と距離の大きい日本語母語話者の私たちの多くは、柳田の悔しさ、志賀の無力感、田中の驚きに、多少とも共感できるし、日本語の将来に責任を持つ者たちの大小の危機感も、随所で見聞きするところである。

本稿は、「日本語」の専門家ではなく、「言語学」の専門家ですらない筆者が、機械翻訳も射程に入れて、日本語の将来のさまざまな論点に触れ、ランダムな問題提起をする研究ノートである。非専門家として、敢えて言えば分野横断的であることを目指して、専門家の気づきにくいところを浮き彫りにするのが目的である。さまざまな問題点を提起するだけで、解決する段階には至っておらず、当然ながら、専門的な正確さは主張していない。本稿がきっかけとなり、専門家を巻き込んださまざまな議論が起これば、研究ノートとしての目的は果たしたことになる¹。

（1）非対称は政治的に不公正

「理想的な国際語」は、すべての使用者にとって「等距離」のものでなければならないが、現実には、国際的に活躍するには英語が必要という「非対称な関係」を直視しなければならない、といわれるような「理想と現実」がある。英語から遠い言語の話者は、それぞれの距離に応じて、非対称な負担を強いられており、これを政治的に公正なものにする課題を、共有している。

非対称の最も極端なケースは、絶滅の危機に瀕した言語である。一例として、シベリアのチュルイム語の報告をみると、調査者が、流暢なチュルイム語話者に「話者だと明かさずにいた理由」を尋ねると、「不名誉なものと思う意識を植えつけられてきた」「先祖の言葉が失われるとは思ひもしなかった」と答えたという（ハリソン、2013）。国内の標準語と方言のあいだに働く力学も、度合いは異なっても、さまざまな優越言語と劣勢言語のあいだに働く力学と同じ言語政治の問題である（原、2013）。

生物多様性の観点から、絶滅危惧種の保存が唱えられるように、文化多元主義の観点からは、少数派言語を保護し、絶滅危惧言語を保存する必要があると訴えられている。それぞれの言語文化を守ることは、

¹ 本稿は、JSPS 科研費、挑戦的研究（萌芽）「『日本語文化』の保存・刷新・発信のための分野横断的・統合的な理論構築」（課題番号：17K18610、代表者：津城寛文、H29～H31年度）の成果の一部である。

政治的ナショナリズムとは区別され、また文化ナショナリズムとも一線を画する、人類文化全体の豊かさのための多言語主義の営みである。人類の未来が、互いの命を消尽し合う戦場や、時間や労力を収奪する工場ではなく、共に学び合う学校だとすれば、このような多様性は、デメリットではなく、むしろ教材の豊かさになる。

(2) 非対称を価値転換する

「保存」という発想には、そのままでは衰弱・衰退して消滅する、という含意がある。日本語は、衰弱・衰退しているかということ、まだ生き活きとしている。その生命力は、日本語で考え、日本語で書かれた文学が、諸言語に自発的に翻訳されて、それらの言語の話者にも感動を与えていることから明らかである。使用者人口からしても、日本語が消滅し去ってしまうことはないので、危惧は、二流の言語になり下がる、ということになる。

この危惧に対応して、「母語は掛け替えのないもの」という以上の期待が、危惧を語る同じ論者によって語られる。それは、カナ、かなといった「＜自分たちの言葉＞の文字をもっている」こと、「西洋の衝撃」に直面した非西洋圏のなかで、「日本近代文学の奇跡」と言われる偉業を成し遂げたことなど、日本語の文化的価値を知れば、このような「高みに達した言葉」が読み書きされなくなれば「人類の文化そのものが貧しくなる」のではないか、「そのような日本語であり続ける運命を……選び直す」のが、日本語に対する、さらには人類の未来に対する義務ではないか、というものである（水村、2008）。

この危惧と期待は正しいが、一つ不足しているのは、国際語が交替する、という歴史的通則を強調していないことである。英・米の旧植民地は、現在、英語という国際語を駆使できるメリットを享受しているが、独・仏や、スペイン・ポルトガル、また日本の旧植民地や、ロシアや中国の支配地域は、不運なことに、そうっていない。英語がいつまで国際語であり続けるかどうか、保証はない。このように、国際語が交替するのに対して、母語はかけがえのないもの、と理解できれば、母語保存はただの懐古的な趣味ではなくなる。

いずれにしても、非対称な劣位に置かれた母語側には、二重三重の錯綜が課される。そしてここから、受け取り方は2つに分かれる。一方で、こうした錯綜した状況は、ローカルな母語話者に労苦を強いるデメリットの裏に、それが精神の一層の深化につながるメリットが強調される。たとえば、荻生徂徠や福沢諭吉が「マイナス点をプラスに転化する」「困難を逆手にとって……有利な点がある」「自覚さえあれば……深く知りうる」と主張したように、である。他方、間欠的に起こる、国際語公用語論があり、これには一定レベル以上の知識人が国際語で勝負しやすいというメリットと、国民・市民が知識人層とそうでない層とに分離し、また言語遺産が衰退するデメリットが懸念されている。たとえば、森有礼が英語を国語にと主張したのに対して、反対者が「インドの例」を引き合いに出して、一般大衆とエリートの言葉が二つに分離すると反駁したように、である（丸山、加藤、1998）。

多言語状況を活用しようとする前者の立場は、「どのようにして」保存、刷新、発信するか、という工夫を考えているが、今のところ、後者の英語第二公用語化と置き代わるほどの名案は、クリアに出していない。一例として、早くから日本語の刷新と発信について論じてきた鈴木孝夫は、「国際化への道筋」つまり、日本語を国際語に接続する道筋として、じっさいに見られる第一の「征服型または植民地型」と、第二の「自己植民地型つまり自己改革型」に加え、「第三の道」として、将来的な「汎世界型つまり世界相互依存型」を区別した。日本が第二の道を進んだ理由として、西洋語が日本にとっての「威信 prestige」であり、その幻影に対する憧れという「蜃気楼 mirage 効果」があった、と述べて、これを第三の道へと切り替える必要がある、というのが、鈴木の一貫した主張である。言われていること自体は新しくないとはいえ、「蜃気楼」とは「幻影 illusion」の一種であり、フランス語から英語に入った prestige はもともと「幻影」を意味するなど、西洋語の知識を用いた洒落た表現になっている。

現代日本でも、「第二の道」を追い求める人びとは、英語公用化論者を中心として、少なくない。もしこれが望ましいとすれば、近代日本が植民地化を免れるために、産業を振興し軍備を整え、植民

地主義まで学び、言語的には母語を確保し、苦心して主要文献をすべて日本語訳し、母語での高等教育を可能にした歴史は、皮肉なミステイク、われわれ日本語母語話者にとっては、悲しい喜劇になる。

鈴木という「第三の道」は、必要性が自覚されて久しい、しかしながらいつまでも解決されない課題である。そのための鈴木の提案は、整理すれば大小3つほどになる。一つめは、人文社会科学が、自然科学のように国際的な貢献をするために、「日本語で書かれている優れた業績」の翻訳・発信を支援すること、二つめは、「国連の公用語に日本語を入れる」こと、三つめは、日本人がとにかく英語を使い出すこと、ただし日本人に使いやすく「日本語化」したリング・フランカ的な新しい人工言語「イングリック Englic」で、優越言語と「一種の言語戦争に入ること」である（鈴木、2011、2015）。

2. 日本語の変容——クレオール化、和漢混交文、和英混交文

鈴木の提案のうち、三つめは、いわば日本版クレオールの提案であり、「クレオール化 creolization」としてまとめれば、孤立した思想ではない。

(1) クレオール化

クレオール語と日本語との関係を集中的に論じている一人、田中克彦の教科書的な整理によれば、「クレオール Creole」という言葉は、ポルトガル語「クリオウロ crioulo」に出自があり、「その土地生まれの」人や物を指した。語源を遡ると、ラテン語の祖型「creo」に至る。「クレオール学の祖」フーゴ・シューハルト (Hugo Schuchardt) は、「俗ラテン語」段階のラテン語の研究から出発し、そうしてできたロマンス諸語から、さらに「新しいロマンス語、つまりクレオール語が生まれてきた」と捉えた。言語が崩れ、新しく作り変えられるプロセスは、「切れ目のつけられない、濃淡さまざまな移行状態」であり、クレオール語の前段階には、つねに道具としての「ピジン pidgin 語」がある。「ピジン語しか話さない親をもったこども」は、「それを受けとり、自分のなっとくが行くように構造化」して、クレオールと呼ばれる「母語」の話者となる。このように、「すべてのことばは、まじりあうことによって変化し、発展してきた」と捉えれば、ロマンス諸語や英語が、「歴史の上で、強いクレオール化を経験した……単純化された言語」であるとわかる。しかし、この「単純化」ということを、欧米のクレオール研究者たちは、「貧弱にする」というニュアンスで、reduce とかりダクション reduction と表現する。「西洋語人がクレオール語を、かれらの母語と対等の言語としてみることはなかった」のである（ショダンソン、2000）。

ところが、もし「日本人がクレオール語をみれば、そこに自らの母語、日本語のすがたを、別の形で再発見する」というのが、田中の主張である。日本「なまり」とか、「日本式」英語とか、揶揄的・自嘲的に言われている事態を、「なまることがささやかながら世界の思想と人類の文化に貢献」すると考えることが、「クレオール学から私たちが学ぶべき最も大切な点」と捉え直される。クレオール語は英語やフランス語を単純化したものだから、日本語も英語を取り込んで独自に単純化してよい、日本語そのものも単純化してよいという、単純化の志向が明らかである（田中、1999）。

まとまったハーン研究を持つ平川祐弘も、ハーンの体験を「今日的にいいなおせば、グローバリゼーションと表裏をなすクレオリゼーション creolization の問題」と捉えている。

世界文学史のあちこちに、「母国語優位を主張する説……ナショナル・ポエティックス」が見られる。敢えて「優位」が主張されない場合でも、母国語で書くべきという主張はなされる。知的な内容なら別種の言語で操作できても、「詩」のような「心の底からの感情の叫び」は、母語でなければ表現できないからであり、この「心の声」は、ナショナリズムと結びつきやすい。

こう一般論を述べたあと、平川は「その母語すらも維持できなくなるほど外部からグローバリゼーションの圧力がかかってくる時はどうすればよいのか」と問いかけ、「非主流のマイノリティ」側にとって「混交は不可避」、つまり広義のクレオール化は不可避と自答している。では、クレオール化は不幸なだけなのかというと、苦しみにはつねに償いがあるように、「クレオール性礼賛 eloge de la creolite」という価値転換が起こる。旧植民地で、かつての宗主国の言語という「負の遺産」が、「支

配の旧悪」を弾劾するための言語となり、また自己表現をするための言語に転換した。「人間存在は多様性と異質性の中に花さく」という宣言は、クレオール化の価値を高らかに主張したものとされる(平川、2013)。

世界の中の日本語の立ち位置を考えた平川、鈴木、田中は、さまざまな違いはありながら、英語との「混交」による「クレオール化」ということでは一致している。本稿も、はるか遠くに「多言語世界」を見据えてはいるが、多言語との対応をいっき目指すのは困難なので、まず第一歩として、国際語である英語を橋渡し言語 vehicle language、あるいは、いわばハブ言語 hub language として戦略的に利用し、そののち、多言語世界への接続を考えたい。

(2) 和漢混交文と和英混交文

「広義のクレオール化」の課題が、現代特有のものではないことは、漢字文化との遭遇による、カナ、かなの創出、「和漢混交文」の成立から明らかである(築島、1977)。カナ・かなで表記される古来の大和言葉と、外来の漢字から成り立っている和漢混交文は、現代日本人がふつうに使う日本語であり、ほとんど意識されないが、注意を促されれば、その混交に気づくことができる。ひらがなやカタカナや和漢混交文の発想は、想像されるとおり、日本のオリジナルというのではなく、中国や、とくに朝鮮の影響がある。宣命小書体、文字の大小といった表記は、日本列島における使用に先立ち、古代朝鮮における漢籍や仏典の「注釈・音義」「訓注形式」に、「漢字に、その字義に対する朝鮮固有語をあてる用法」があり、それを渡来人が持ち込んだものである(沖森、2003。船山、2013)。現在のわれわれが直面しているのも、同様の課題である。日本語のさらなる中・長期的な保存のための装置、工夫として、和漢混交文に相当するものを見ると、とりあえずは「和英混交文」となるだろう。

和英混交文ということ、私が考え始めたのは、高校の英語の授業で聞いた、教師の「hero が heroine を lagoon で shark から rescue した」という一言である。“The hero rescued the heroine from the shark in the lagoon.”と言われると英語だが、「てにをは」と「する動詞」その他で、外国語単語をつなげると、日本語として、コード・スイッチングなしに理解できる。このように、私はかなり前から、和英混交文ということを考えていたが、このキーワードのオリジナルはどこにあるだろうか。

『岩波講座日本語』の「和漢混濁文」論文をみると、「漢文訓読」は、「外国語の文章を解説しようとして、受動的に日本語によって読み下した、消極的な翻訳の手法」であり、他方「和文」は、「積極的に自らの日本語の文章を生産していく態度に立った時の一つの文体」であり、それらが合流して、「和漢混濁文」が成立した」と跡づけたあと、その延長線上で、「翻訳口調」「翻訳臭のある文」「直訳の文」と呼ばれるものを、「和洋混濁文」「和漢洋混濁文」と言えないか、と述べている。しかしその「概念が確立していない」ので、自らそう名乗る文体は目に付かないという(山田、1977)。ここでは、「翻訳口調」や「直訳の文」を「和洋混濁文」と呼ぼうとしているが、日本文にアルファベットやカナ書きの単語が積極的に入るわけではないので、私の考えている和英混交文とは異なっている。

漢字二字による翻訳語の「カセット効果」説で有名な柳父章は、和英混交文とは言っていないものの、その寸前まで来ている箇所がある。「□□な□□が□□□□で□□……」という文体の、□□の部分には、「カタカナの外来語でも、漢字の翻訳語でも、アルファベットの言葉でも」、きわめて簡単に入れることができる、この「便利な外国語受け入れ構造」は、「日本人が千数百年かけて創り上げてきた……日本文化最大の発明」だと述べている(柳父、1998)。

最近では、英語学習法を工夫している池田和弘が、「実戦の場面で本当に役に立つのは英語構文の知識よりむしろ単語の知識」であり、「単語であればただ並べていくだけで」意味が通じると述べている(池田、1992)。ポイントは、英語学習において、日本語の中に英単語を入れて覚える、ということであり、これをエッセイで「和英混交文」の主張につなげている²。

² 池田和弘オフィシャルブログ「筑波大学 ICR・国際日本研究専攻共催特別シンポジウムに出席」<http://kazuhirokeda.com/blog> 2017年4月22日最終確認。

では、日本語と英語は、どのように混ざるのだろうか。単純に「個別単語がX語からY語へと入っていく……借用語」は広く見られるが、言語接触の現場からは、もっと絡み合った報告もある。「日本語が話せるアメリカ人」と「英語が話せる日本人」のあいだの、「ジョンさんではでも you must have studied こう、一生懸命だったでしょう？ I studied about 三時間勉強したよ」という会話例では、前半では「コード切り替え」「コード・スイッチング」「コード交換」が起こっており、後半では「同じ情報 (study、勉強) が両方の言語で重複」している。別の例では、「yesterday, meらは松本ドクターとカノに乗ってボービタイの前で fishing をしたけど、nobody caught any スクモメ」のように、「英語と日本語がほとんどそのまま同一文内で入り混じった」だけで、「ピジンに見られる単純化やクレオールに見られる文法体系の再構築」はない (ロング、2013)。

これらが示すように、「混交の度合い」はさまざまあり得る。試行錯誤を繰り返した和漢混交文について、「混交の度合いは……一様ではない」と言われているのと事情は同じであり、さまざまなスタイルや表記が、長い時間をかけて、一定の幅に収斂していくことが想像される。

3. 日本語の表記——ルビ、原語併記

日本語にはさまざまな側面があるが、本稿ではまず「表記」に焦点を絞る。和英混交文その他、あり得る日本文について、翻訳に適合的という観点から見直したとき、未来の日本語を論じている者たちは、表記に関して、どのような提案をしているだろうか。

(1) ルビ

井上ひさしに、ルビを積極的に評価するエッセイがある。^{ルビはそんなとくかをかかんがえる}「振仮名損得勘定」というタイトルの章で、繰り返し批判の対象となるのは、ふりがなを「黒い虫」と呼んだ、山本有三のいわゆる「ふりがな廃止論」である (山本、1939)。この論は、雑誌発表時には総ルビであったが、単行本に収められたとき、主張どおり、ルビはすべて取られた。当時、官民あげてふりがな廃止が目指されたが、力づくでは統制できない需要があり、便利さもあって、廃止しきれなかった。そしてその後の流れは、漢字の緩やかな制限 (当用漢字、同音の漢字による書きかえ、など) に留まり、ふりがな問題はほとんど語られることはなくなった。

これに対する井上ひさしの見方は、「振り仮名がさかんになって行く動きと、一部の人たちのための知識や知的な楽しみが大勢の人びとのものになっていく動きとは完全に見合っている」、つまりエリートの独占する「知的な楽しみ」が、ふりがなによって「大勢の人びと」に開放された、というものである。実際、明治以来の印刷物は、『聖書』の翻訳を含め、総ルビのものが少なくなり、これが庶民の知的レベルの嵩上げに、効果があったとされている。

みづからを「知識人」とは呼ばない井上ひさしは、知識人と大衆という傲慢な二分法を嫌うので、自称知識人が「大衆」と表現するところを、「大勢の人びと」と呼ぶ。その「大勢の人びと」のための、学習の便宜となるふりがなとは別に、作家である井上は、いわば「方法としての振仮名」にも言及している。そこでは、「蹂躪」が「ジュウリン」とも「ふみにじる」とも読めるとき、「どちらの語を書くつもりであったか」、ふりがなで示すことができる。たとえば滝沢馬琴の「振仮名への「執着」」「過剰なまでの振仮名の使用」は、「方法 (manière=マニエール)」的に追及した「振仮名のマニエリズム」として、表記の多重化が、文章の多重化、複雑化につながることも、説き分けられている (井上、1981)。サザンオールスターズの「素敵な夢を叶えましょう」の歌詞について、「表現としての振り仮名」といわれるのもこの例である (今野、2009)。

ふりがな (漢字を「翻訳」する1つの方法にほかならない) を含む翻訳について、論者の知的な背景を見ると、これを消極的に見る考えと、積極的に捉える考えとが、それぞれの立場と相関することが、あらためて浮き彫りになる。アカデミズムの主流を歩み、手引きを必要としない知識人は、これらを大衆のための便宜として許容するか、あるいは恥ずべきものとして拒否する傾向にあるが、主流から外れた者や、一次文献を読む環境にない独学家や、教養を求める「大勢の人びと」は、自他のた

めの次善の手引きとして、これらを重視せざるを得ない。

一例として、「リゴリスティックな研究者」吉川幸次郎が、「翻訳というものは、要するに方便」としたのを受けて、篠田一士は、上田敏批判の中で、「吉川の翻訳観を全面的に支持」し、「注解入り、さらには原文入りの訳詩集や評釈本」が登場してきたのを、当然のことと判断した、という。「上田敏批判」とは、一世を風靡した訳詩集『海潮音』が、直訳とは真逆の、なかば創作のような意識で、西洋への憧れを誘った現象を指している。このエピソードについて川村二郎は、「研究者は知らず、現実的に一般文学読者の場に身を置いて考える時」、注解・原文付きの翻訳は「疑問」であると述べている（川村、1981）。これは一見、一般読者の立場を代弁しているようであるが、私はむしろ、翻訳の情報開示を否定するのは、一般読者から学習の機会を奪うものではないか、とも思う。すべての翻訳作品ではないにせよ、一部の翻訳作品を「注解入り、さらには原文入り」で提供することは、「大勢の人びと」の「知的な楽しみ」の手引きになる。井上ひさしが擁護しているのは、これである。

煩瑣な注解や多重表記の方向とは逆に、日本語のクレオール化を唱える田中克彦は、明治の井上哲次郎や、敗戦直後の志賀直哉らの「深い日本語ベシズム」を共有し、ふりがな廃止より前に、そもそも漢字の制限、廃止を主張する。「日本語が世界の国際舞台では使いものにならない」こと、しかし「そう簡単に日本語をすて」られないことを痛感するゆえに、英語やエスペラントをまるまる採用する、という選択肢はない。そこで候補にあがってきたのが、日本語を「国際舞台」で通用するように変化するという、クレオール化の方向である（田中、1999）。そして日本語をクレオール化していくか工夫は、漢字廃止、ローマ字書きという、表記に関する2つの提案である。

すべての言語が「国際言語マーケットでセリにかけられている」現在、日本語も、内輪の「村ことば」ではなく、「世界に開かれたことば」になることが求められており、「使い勝手」のよい「実用の日本語」が必要である、というのが、漢字を制限する論拠である。これまでも、同様の考えから、一種類の文字だけで日本語を表記する「カナモジ運動」や、「ローマ字運動」があり、もしこれを認めていたら、外国人にとって日本語の壁が低くなったのに、「受け入れられてはいない」、というのが田中の嘆きである（田中、2011）。「すべて」という極論ではなく、「一部」の漢字廃止、ローマ字表記、かな表記を認めようということであれば、この提案は具体化する価値があり、じっさいに、「やさしい日本語」や「文簡易化」その他が試みられてもいる（フィンチ他、2005。庵他、2010）。

（2）原語併記

鈴木孝夫は文体について、二つのことを述べていた。1つは、ジャパニーズ英語の一種である「イングリック Englic (English-like-language)」であり、「リング・フランカの側面が大きくなった」英語を原料に、「私たちの作った新しい人工言語」を使う、という提案である。この日本的にクレオール化した Japanese English の提案が、繰り返し述べられているのに対して、逆の、いわば英語化した日本語 English Japanese、つまり和英混交文の提案も、非自覚的ながら、ところどころに読み取ることができる。

漢字を「中国の発音通り」に「音読」し、「日本単語の発音をあて」て「訓読」する、という二重読みと、「概念そのものは、視覚に訴える「水」という文字で表記」されていることについて、「あまりになれてしまって、その意味を深く考えることをしない」が、「非常に素晴らしいこと」と、鈴木は考える。英語とヨーロッパ古典語との関係を見ると、たとえば、「anthropology (人類学)」の「anthropo-」はギリシア語で「人」を意味するが、このような「高級語彙は一般の人の理解の外」にある。これに対して、日本語で「人類学」とあれば、正確には分からなくても、中学生でも「ひとのたぐい」と理解できるのは、「二通りの読み分けを、ほとんどすべての概念（漢字）に対して行える」からである、と対比される。

その上で、英語をどのようにして、日本語の中で、音読み、訓読みするか、という話になる。ヨーロッパ系の外来語は、現代日本語では、カナ書きされる。たとえば「パイプ」というカタカナ語は、たばこを吸うパイプ、ガス管など、管状のものを指す。元の英語では同一の言葉であり、英語を母語とする人は、そこに共通性を認めることができるが、しかし、普通の日本人にはできない。そこで提

案されるのが、「パイプのことを、綴りも表記も英語そのまま日本語に入れて、pipe と書き、しかもこれをくだ(管)とも読む一種の訓読みの習慣」であり、こうすれば「タバコのパイプとガスのパイプは別々の言葉に分化しないですんだと思う。漢字に対して日本語はまさにこれをやっている」とされる(鈴木、1975)。これはまさに、和漢混交文をモデルにした、和英混交文の提案である。

(3) ルビ、原語併記

漢字に訓読みがあり、時にフリガナが付くことで、煩瑣であっても知的レベルを高める学習上の効果があるのであれば、和英混交文では、そこにさらに英語が混ざることで、さらに煩瑣になるが、それがさらに「日本人の知的生活のレベルを高める働き」をする可能性がある。その基盤は、和文であり、ところどころ漢字に加え、カナ書きやローマ字の原語を入れ込む、振り付ける、あるいは貼り付けることで、字面は錯綜するが、意味はわかりやすくなる。

カナダ出身のジャーナリストで、日本に帰化したベンジャミン・フルフォードは、実験的な著書で、「英語(あるいは他の外国語)混じりの4重表記」を試みている。「4重表記」とは、「ひらがな、カタカナ、漢字」の「3重表記」プラス英語(他)のことで、「いわば日本語表記の未来形」とされている。実はこれは、フルフォード個人の仕掛けというより、Kobunsha Paperbacks(光文社ペーパーバック)の方針である。表記の一例は、「匿名預金 とくめいよきん anonymous account」というように漢字にルビが付くだけでなく、「社会主義国家と変わらぬ統制経済 コントロールド エコノミー controlled economy」というふうに英語にルビ(発音のカナ書き)が付いているところもある(フルフォード、2004)。この奇妙なスタイルの叢書は、和英混交文の実例であり、同様の著書がいくつか出版されている(フルフォード、2002、2003)。

類似の別のシリーズとして、講談社 Kodansha Ruby Books があり、これは英単語のところどころに和訳をルビのように付けることで、「日本語と英訳の対照本よりは相当見やすい」「もっと普及しても良い形式だと思う」という読者レビューがあるとおおり、対訳より手間が少ない³。

ほかにもさまざまな可能性があるが、「日本語は捨てられない」のであれば、膠着語としての性格は変わらず、「てにをは」と「する」でつながる単語に外国語(とりあえずは英語中心)が混ざる「和英混交文」以外の方向はあり得ない。様々な度合いの和英混交文から、「ジャパニーズ英語」への移行は、連続的であり、英語に、そして英語を介して多言語にも、容易に変換されるので、日本語ベースの発信型の文体となる可能性がある。

4. 表記と内容の組み合わせ

鈴木らは漢字について、「欧米の言語学が見落とした漢字の隠れた働き」は、「文字のもつ視覚的刺激」である、と指摘した。日本語が「非効率」だという批判に対しては、「日本が立派に発達した……事実」を対置して、「漢字仮名混じりの表記法を採っている日本語の全体としての効率が極めて高い」、とくに、訓読みは「外国語の手引き」であり、「日本人の知的生活のレベルを高める働きをして……日本語を救った」と述べていた(鈴木、2014)。

ここで注目したいのは、一般人の知的レベルを嵩上げするために、表記のための文字をいくつも混ぜて、あえて複雑にするという、「複雑化」が示唆されていることである。カナモジ運動や、ローマ字運動、エスペラント運動が広がらないのは、どれも原理主義的に一元的な「単純化」だからである。表記も語彙も多元的なほうが、それぞれを支持する人が足し算されて、広がるにちがいない。

(1) 表記の単純化／複雑化、内容の平易化／晦渋化

一元的な単純化を説く田中と、多元的な複雑化を説く鈴木が対論したら、どうなるだろうか。興味深いことに、ローマ字表記の「部分的」な導入ということが、落とし所の1つとなった。鈴木が「言語財を輸出」する希望を述べたのに対して、田中は、外国人に対しては「ローマ字日本語を第二の日

³ Amazonの『そして誰もいなくなった』[英語版ルビ訳付] 講談社ルビー・ブックス(英語) 新書(1999/4/28)のレビュー。2018年10月15日確認。アドレスは長すぎるため省く。

本語として認める」のがよい、ちょうど中国の製品が「全部ピンインと漢字の両方で」書かれているように、「バイリンガルというよりもバイリテラル」がいい、「漢字をやめて日本語そのもの」を、「ローマ字でも何でもいから日本語」を、と提案した。これを受けて鈴木は、「今まであまり考えなかった」が、「英語を第二公用語にするより、はるかに現実性のある良い考えだ」と応じた（鈴木、田中、2008）。これは、日本語を外国人に広める課題について、「単純化」で合意したものである。

こうした鈴木と田中のさまざまな提案を持ち寄って、さらに日本人にとっての戦力となる日本語、ということを見ると、日本文に、ローマ字、アルファベット（その他の文字）も、随所で併記したり、ルビヤ注で付けたりする、「複雑化」の方向もあり得るのではないだろうか。

「複雑化」を最も単純に考えると、複数の言語を混ぜるのではなく、それぞれ分離して並べるだけの、多言語表示である。聖書や仏典の和英対訳版、ポリグロット版聖書など、ページを分割して、または見開きのページで対応させる書式もある。これらに共通するのは、権威あるテキストという点で、全文を対訳で提供する価値が認められ、需要もある、ということである。また、現在は官公庁の事業や、行政の発行するパンフレットなど、実用的な文書で、多言語併記の取り組みが進んでいる（藤井、2013）。これは可能性ではなく、すでに現実である。

さらに、ここ数年の傾向として、大学等の事務文書で、一文一文対応の書式が増えてきたのに気付く。1例として、筑波大学・国際日本研究専攻のホームページは、トップページ（HOME）の冒頭がつぎのようになっており、日本語と英語を、同時に一覧できる⁴。こうした一文一文対応の書式のメリットは、大きな視線の移動がないことである。

こちらのホームページでは筑波大学大学院・人文社会科学研究科・国際日本研究専攻の講義のカリキュラム、教員紹介、入試情報などの情報提供をしております。

Find information about the Master's and Doctoral Program in International and Advanced Japanese Studies in the Graduate School of Humanities and Social Sciences at the University of Tsukuba.

（2）日本文の4つのタイプ

あらゆる言語が翻訳されるものであることを前提として、翻訳しやすさを念頭に、将来的な多言語世界における日本語の文体・書式のあり方を展望しよう。ここでは「表記」を軸とする視点から、単純化したモデル化を目指しているので、方法論上、その他のさまざまな論点は捨象することを断っておく。

表記について「単純 simple」と「複雑 complex」を対比したのに加え、さらに内容を考慮に入れて、「明快 clear」と「晦渋 obscure」を対比してみよう。この表記と内容の2つのパラメータを交差させると、つぎのような日本語の4タイプが出現し、それぞれの論者の立ち位置が、わかりやすくなる。

漢字については、周知のように、その視覚的な価値を見直す動きがある。ソシユール由来の「聴覚映像」というタームをみるたびに、私も「漢字は視覚映像ではないのか？」と違和感を持った。「音声言語」が直接的で、「文字言語」は副次的な形式にすぎないとする、ソシユールが強調した言語観が、それ以後の記号学一般では変貌し、「絵画や映画・演劇までも表現としての言語」とみなされ、「漢字も……文字映像として新しく位置づけられようとしている」のである（白川、1978）。漢字はこうして、言語史の最後尾から最先端に、移されようとしているのだが、これを4タイプの中で考えると、適切な漢字を混ぜることで、表記はある程度「複雑」化するが、意味内容としてはわかりやすくなり、む

表－1 日本語の4タイプ

内容 content \ 表記 notation	単純 simple	複雑 complex
明快 clear	(A) 単純・明快	(B) 複雑・明快
晦渋 obscure	(C) 単純・晦渋	(D) 複雑・晦渋

⁴ <http://japan.tsukuba.ac.jp/> 2018年6月30日最終確認。

しろ「明快」になる。和漢混交文はこれであり、英語を積極的に混ぜる和英混交文も、一文一文対応の表記も同様であり、これらはすべて (B) 型になる。

「カセット効果」とは、西洋文化を受け入れる際、要所に「意味の凝縮したような難しそうな」、漢字2字の単語を用いたことを指しており、近代日本の翻訳の特徴をよく表現している。「カセット効果と意味は……反比例の関係」で、「意味が通じにくい言葉」が「カセット効果は強い」と定義されるように、表記については、字数が少ないという意味で「単純」化であり、意味理解については、「難しそうな」という意味で「晦渋」化、つまり (C) 型である (柳父、1998)。

近代日本哲学の一つの試みとして、「日本語による哲学」「日本語で哲学する」という一縷の流れがある。共通するのは、キーワードが、西洋語の翻訳ではない、オリジナルの日本語である、ということだが、その「日本語」には、いくつかのレベルがある。

前近代の国学の核心でもあったこの問題が、近代になってあらためて自覚されたのは、和辻哲郎の論文「日本語と哲学の問題」(1929初出、1935改定)においてであり、「日本語をもって思索する哲学者よ、生れいでよ」という結びの一節が、しばしば引用される。内容は、日本語で書かれた「文芸」や「歴史書」が豊かなのに対して、「学問的思想」は乏しいこと、思想が「漢語漢文」によって展開され、近代になって「日本語化した漢語の新しい組み合わせによって……ヨーロッパの学問の伝統をそのまま受け入れ得る……新しい日本語を作り出した」ため、「学問語と日常語及び文芸語との間には常にある距り」があること、などが跡づけられ、後半で、「あるということはどういうことであるか」なる文をめぐる、大和言葉の基本語が延々と論じられている (和辻、1962。飯島、2015)。

このうち、「日常語」を強調すると、「日常の日本語を一応ベースにして、術語や専門語をできるだけ使わないで」という立場が出てくる。「現代」の「日常」の日本語という意味であり、表記は「単純」さ、内容は「明快」さを目指す、(A) 型になる (中村、1985)。

「日本語で哲学する」から「大和言葉で哲学する」となると、キーワードが大和言葉になる (竹内、2012、2015)。この立場を極端に推し進めると、それは和漢混交文以前の、和文になる。表記は「単純」化されるが、非日常的な古語に、聞きなれない意味内容が盛り込まれ、漢字2字の近代翻訳語と同じような「カセット効果」を持つことになる。現代人には、かえってわかりにくい文体であり、(C) 型になる。

「単純」かつ「明快」な (A) 型の日本語は、もっぱら「ローマ字会」や「カナモジカイ」によって主張された。どちらの団体も現存しているが、勢力としては極小である。千年以上も続いた和漢混交文によって、漢字は日本語の血肉になっているからである。しかし、初期条件を踏まえたうえで、漸進的に刷新することは可能で、方針としては、漢字は全廃止ではなく、できるだけ減らしていくこと、通用する簡易な漢字に置き換えることが考えられている。外国人向けの日本語は、このタイプの成功例になるだろう。「在住外国人と地域住民とのコミュニケーション」を円滑にするための「やさしい日本語」の提案も、この A 型の典型的な試みである (庵他、2010)。

では、残った (D) のタイプは、どのような日本語だろうか。これまで引用した例で言えば、井上ひさしの言う「振仮名のマニエリズム」などが、これに当たる。ほかに適切な例を探すと、「編集」を自覚的な方法として、多彩な分野を横断している松岡正剛などが、表記に関しては「複雑」化、内容に関しても「晦渋」化を追求しており、この典型である。

松岡は、現代フランス思想が「インターテクスチュアリティ」(相互テキスト連関性) ということをも提唱したのを受けて、この「さまざまなテキスト」がつながりあっていること、「どんなテキストもそれ自体が歴史的な「インターテキスト」であることから、それをさらに進めて、「インタースコア」という言葉を造語し、「相互記譜」と訳した。現代社会の「情報化」「編集化」は、あらゆるものを「スコアリング」し、それらが「カサネ・アワセをおこしている」、その全体集合が「インタースコア」である。松岡の「方法」はこのような「インタースコア」であり、対象は「日本」である (松岡、2009)。松岡が「インタースコア」という造語で目指しているのは、定義からして表記の「複雑」化であり、内容的にも「晦渋」化の側面がないとは言えない。鈴木や田中が、ヨーロッパ語について、それらが外国人に与える威信 prestige や蜃気楼 mirage 効果を語ったように、複雑化し晦渋化した日

本語は、外国語を母語とする知識層には、魔術的な効果を放ち得る。

ただし、難しい内容を精密に語ろうとすることと、晦渋化することとは、紙一重である。しかもそれは、著者の能力や嗜好だけでなく、読者の理解力によるところが大きい。日本語をキーワードにした哲学を試みる坂部恵は、「ふるまい、ふり、まい、せぬひま」という「四つの構成契機ないし成層」からなる系列を主軸とする、「増補されていくタブローあるいはチャート」を作成し、「ふるまい」には praxis、「ふり」には mimēis、「まい」には harmonia, rhythmos とギリシア語を対応させ、その周辺に、やまとことば（まねび、ならい、ひとがら、心ばせ、など）を、「日常の言語意識に即して」配置し、それを多くの漢語やそれぞれに対応するギリシア語に関連づけている。さらに、「ふるまい、ふり、まい、せぬひま」は、「はなし、かたり、うた、しじま」、「おもて（ひと・うつしみ）、うつり（よそおい）、ひびき、あわい・ふれ」に展開されている（坂部、1997）。多言語を駆使した議論は、私の乏しい能力ではすべてを明快には理解できないが、少なくとも、「晦渋」化という印象は受けない。これが（B）型であるか（D）型であるかは、一義的には決まらず、書き手と読み手の組み合わせに依存する。

4つのタイプの日本語から考えると、「わかりやすくする」という目的を、外国人向けと、日本人向けに、分ける必要があることが、浮き彫りになってくる。ひらがな（カタカナ）文やローマ字文の日本語を許容する、という方向は、外国人向けに壁を低くする、「単純」化・「明快＝平易」化である（（A）型）。他方、ルビや、原語併記、大和言葉による単語の読み下しなど、表記を複雑にすることにより、むしろ理解がしやすくなる方向は、知的向上心を持つ日本人向けの、「複雑」化・「明快」化である（（B）型）。日本語母語話者にとっての、教育的な和英混交文が目指すところは、とりあえず、この後者の方向になるだろう。どちらも、一方は日常生活用の日本語という意味で、他方は多数の言語に接続しようとする日本語という意味で、翻訳に適合的である。

クレオール研究が浮き彫りにしたように、言語はすべて、先行する複数言語が混ざったもので、原理的に「混成言語」である。その言語の表記や語彙を、一義的に「単純」化しようとするのは、民族浄化に類する、言語的クレンジングになる。ローマ字会やカナモジカイの挫折、また人工的な世界共通語である 에스ぺ란โต の停滞が示しているように、過度な「単純」化への志向は、「確かさへの逃避」と表現される原理主義的なメンタリティーであり、現実にある曖昧さ、複雑さ、多元性、多重性、多義性を嫌うという意味で共通し、したがって狭く自閉している（フート、2002）。

民族浄化よりは、多民族共生、異文化共存、文化多元主義が望ましいし、現実もそうになっているとすれば、言語的にも、単純化ではなく、複雑化が望ましいし、今のところそうになっている。われわれに必要なのは、その現実の複雑さ、多重性を、理論的・実用的に洗練することである。

そのような多重・多様な表記や語彙の中では、統一化を強要する原理主義的な立場を除いて、多くの表記・語彙が、和歌や警句などの単純・晦渋な（C）型、文体を彫琢した複雑・晦渋な（D）型も含めて、安住することができる。日本語の一つの頂点である大和言葉は、一つの特異な表記・語彙として、死語ではなく、生きた化石として、息づくことができる。

（3）大和言葉のエッセンスの保存

複雑化し、多重化した日本語は、和英混交文を推進する一方、大和言葉も保存することができるが、ただしそれは、英語や現代文のような、実用的な道具としてではなく、書道や美術や音楽などと同様、また道徳や家庭科と同じように、広い意味での教養として保存することになるだろう。教養の必要を感じないのは、教養のない人だけである。私見では、英語その他を混交した和英混交文では、発音はクレオール化、つまり日本的に単純化し、一部の文書の表記や語彙は、多様な日本語を保存して多重化、複雑化することで、威信 prestige が高まり、魔術的魅力を増すことになる。

渡部昇一は、専門の中英語や古英語との比較から、日本語と英語とのあいだに、つぎのような平行現象を指摘する。典型的な和漢混交文である『太平記』は現代人が読んでもどうにか「意味が通る」が、純粹和文の『源氏物語』となると「なかなか意味が頭にはいらない」のは、英文学において、現代英語に直結する『カンタベリ物語』は「比較的わかりやすい」が、古英語の『ベオウルフ Beowulf』が「きわめて難しい」と同様である。これらは、「語彙における外来語の問題」であり、現代日本語も

現代英語も、「語彙の中に数十パーセントの外来語を含む」ため、古語との隔たりが大きいのである。

古日本語や古英語の特徴として、基礎語彙から派生語が根を張って増える、という現象がある。こういう「根の張り方」は、現代の日本語や英語ではまったく失われて、増殖力はなくなっている。「心の中に根を張って、そこから生えてきた」増殖力のある言葉を、渡部は「言霊がある言葉」と呼んでいる。言霊の力を最大限に発揮しているのが、大和言葉による和歌であり、日本語の宝とされる。

『源氏物語』の和文は理解しにくく、和歌によって大和言葉を維持する、と述べているのは、一貫性がないようだが、注目に値する。源氏物語は長い小説であり、ハイライトシーンをつなぐ地の文が、延々と続いている。「言霊」を学ぶには、文芸のエッセンスである詩歌に集中すればよい、日本語についていえば、大和言葉の和歌に焦点を当てればよい、という立場であり、私もまったく同感である(渡部、1974)。

和歌が漢語を避けるのは、伝統的な姿勢である。「気」「地」といった、もう漢語か和語か区別がつかないほどになった言葉以外の漢語が入ると、古典的な和歌の響きは害われる。「釈教歌」などですら、歌そのものに漢語が入るのは少数派で⁵、たとえばつぎのように、詞書には漢訳の仏教語を使いつつ、和歌は大和言葉だけで詠まれるものがほとんどである(次田校訂、1944)。

葉草喩品の心を詠ませ給うける
さまざまに 千千の草木の 程はあれど 一つ雨にぞ めぐみそめぬる
崇徳院御製

詩人のエリオット (T. S. Eliot) も、「人々の最も深い感情の最も意識的な表現が、詩以外の芸術や他国語の詩によりも、母国語の詩にある」と言っているとおり(エリオット、1971)、母語の詩によって太古以来の「情緒」の流れに参加することは、民族的・国民的な「感情教育」になるのであり、日本語話者にとって、大和言葉の和歌は、そのための最適な乗り物となる。

5. 維持コストのビジネス化——多言語併記、機械翻訳

文化とは「面倒なこと」なのであり、高度さの度合いにしたがって、面倒さが学びにもなり、ビジネスにもなる。言語も、コンテンツが魅力的であれば、強制されずとも、その面倒な言語・文化を学習し、実践しようとする人が、自発的に出てくるものである。

(1) 多言語併記のコスト

英語から遠い日本語のような言語圏において、英語と母語を切り離すことがうまくいかないのは、証明済みといってよい。たとえば2005年に設立された国際日本学会が、10年以上たっても広がりを見せていない最大の原因は、趣意書で「つぎの三点を原則」とあるうち、三つめの「学会・研究会の使用言語は英語とする」という限定にあると思われる⁶。発表者や一部の聴衆は優秀なバイリンガルでも、それを見聞きする私のような英語力の低い者には、言葉の壁によってアクセスが制限され、結果として裾野が広がらないのである。

すでに日英(+中国語、韓国語などの)併記は、もともとの多言語社会のように、日常生活のあちこちで見かけられる。出版物においても、この多言語併記の方向を部分的にでも進める試みが、平均的知性を少しずつ知的な multilingual (多言語を話す)、multiliterate (多言語を読み書きする)とするための装置となっている。手間がかかるというデメリットは、多様であるというメリットと不可分である。そのコストは、豊かさ、学びのためのコストであり、学習の日常化 (common learning) のためのコスト、とくに知的中流層の国際語(英語)の習得のためのインフラコストに他ならない。

日本人が英語を運用するための工夫として、「日本の歴史や文化を英語で勉強すること」が有効と

⁵ 漢語(外国語)が入る例として、「何もみな厭はぬ山の草木には阿耨菩提の花ぞ咲くべき」などがある(『玉葉和歌集』巻第十九「釈教歌」)。

⁶ http://www.iajs.net/about_iajs.html 2018年6月16日確認。

いう提案、「英語科」の教材のテーマとして「日本」を使うという提案は、日本を発信する基礎としても有効である。さらに言えば、教科書のキーワードを和・英その他併記にすることで、英文への接続が容易になり、英語への全文翻訳を容易に、かつ正確にし、多少とも日本化した英語 (Japanese English) の運用にも直結する (鈴木、2011、2015)。

また知的出版物 (論文、論説、思想、文学、芸術、政治) と、実用書類では、文体が異なる可能性があるが、どのような文体になるにせよ、現実的な問題は、混交の度合いが収斂していく方向である。技術的に、横書きが有利であることは、わかりやすい。その他の、原語併記、ルビ、カナ訳語などの試行錯誤の整理、そのメリット・デメリットの評価、さらなるオルタナティブの探究など、広範囲に多様な議論が起り、多少ともコストのかかる試行錯誤が繰り返されることで、スタンダードなスタイルに収斂していくことが期待される。

(2) 機械翻訳のコスト

言語のポリティックスの実現が、最も少ないコストで期待される機械翻訳については、英語公用語化のコストを論じた論説でも言及されているように (井上、2002)、現在、国内外、官民の機関で研究・開発が進められ、実用的な翻訳装置がすでに普及しつつある。

私が機械翻訳の現状を調べはじめたのは、ごく最近のことであるが、日本語や言語学を専門とする周囲の同僚の中にも、機械翻訳を研究テーマに加えている者はいなかった。現場での進歩が著しい機械翻訳は、人文社会系の研究対象となるには、開発速度があまりに急速だからであろう。そこで自らこの話題を調べ、開発の最先端の1つである NICT⁷の中の1部門、ASTREC⁸において、研究開発の現状を確認した。

センターの紹介文では、「世界の「言葉の壁」を打ち破り、グローバルで自由な交流の実現を目標として、多言語音声翻訳技術の研究開発と産学官の連携による社会実装を推進」とうたわれている⁹。この総務省主導の機械翻訳プロジェクトは、2017年度後半から「翻訳バンク」を設置し、それぞれの専門分野の「文書」の対訳データを募集しはじめている¹⁰。実用に直結する医療、特許、交通などの分野のデータはすでに蓄積され、法律、経済、金融、薬学、製造業などのデータは進行中だが、実益につながりにくい歴史、地理、哲学、思想などの人文系のデータは未着手である¹¹。われわれはまさに、そのデータ提供に貢献できる。

ただちに使用できるのは、私自らの持つ対訳データである (Casanova, 1994. カサノヴァ, 1997. Muller, 1905. ミュラー, 2003)。また翻訳しやすい拙著・拙論 (津城、1995。津城、2016) を英訳して、対訳データ化することができる。この小規模な作業をきっかけとして、内外の諸大学、諸学会からの、大規模な対訳データの提供を促したい。

その際、機械翻訳を前提として、どのような日本語を書き、どのように話すのが適切か、その作法が、改めて問われてくる。本稿の焦点である、日本語の「表記」の問題は、ここに直結する。学術用の機械翻訳との接続のよい文体・表記は、ルビや原語併記を多用した複雑な表記 ((B) 型の日本語) になるという予想は、すでに述べた。キーワードの適切な理解は、適切な異文化コミュニケーションの条件であり、キーワードが多言語で併記してあれば、誤読の恐れは低くなる。そのような文体・表記が、日本語と英語 (その他) の双方向性の翻訳に対応するものとして、標準化されていくことが期待される。

⁷ National Institute of Information and Communications Technology 情報通信研究機構。

⁸ The Advanced Speech Translation Research and Development Promotion Center 先進的音声翻訳研究開発推進センター。

⁹ <http://astrec.nict.go.jp/index.html> 2017年11月13日確認。

¹⁰ 対訳データを一文一文対応でエクセルに入力したファイルが、求められている。なお、著作権の問題は発生しないことが、同プロジェクトにおいて確認されている。

¹¹ 隅田英一郎 国立研究開発法人情報通信研究機構「AI 翻訳技術のいまと東京五輪への展望」https://www.youtube.com/watch?v=Qh8nhO7N4OE&list=PLBwwDuSrrNU2XO3dkG_13xb3a9xLQJkpU 2018年4月3日の公開講演。2018年4月29日確認。

他方で、機械翻訳のために、文章を簡単に言い換えるという、単純化した表記(A型)の提案もある(フィンチ他、2005)。どちらが効率的か、効果的かは、文書の性格による。おそらく、専門性の強い学術文書では(B)型が、それ以外では(A)型が、相性がいいのではないだろうか。

現在、私は以上の論の延長線上で、機械翻訳を組み込んだ同時通訳会議の実験を、バルセロナ自治大学(Autonomous University of Barcelona, UAB)の同僚たちと、共同で構想しつつある。同大学には、翻訳通訳学部(Faculty of Translation and Interpreting)と東アジア研究プログラム(The East Asian Studies Program)があり、ヨーロッパでも屈指の通訳会議室(Interpreting room)を備えている。国際会議でのディスカッションに後れをとることが多い日本人研究者が、言葉の壁を超えて活躍するための工夫を、ここで試みたい。

機械翻訳の普及には、副産物が予想される。多言語が使用される学術発表、熟慮を要する発話では、慌ただしい同時通訳ではなく、多少のインターバルを取ることが、プレゼンテーションの作法になると考えられる。間合いを取れば、議論は冷静になり、相手の発言をふさぐ非礼も少なくなる。機械翻訳の発展は、言語の闘技場における英語の一人勝ちを是正するので、英語を使用言語と(して強要)する一元的な制度は、とくに英語圏以外では、多言語の混在する多元的制度に取って代わられるだろう。そこでの英語の位置は、ターゲット言語ではなく、インターフェイス言語になる。

言うまでもなく、すべての発話や文書を翻訳するのは不可能であり、もちろんその必要もない。現時点では、英語化の圧力が最も強いところで、まずは英語への翻訳可能性を高め、多言語への翻訳へと拡張し、それによってより良い母語を保存するのが、将来を見据えた日本研究の一つの使命と思われる。ここではわずかな私案を示したにすぎず、そのための方法は多様であってよいのである。

参考文献

- 飯島裕治「和辻哲郎の言語哲学：「日本語で哲学する」ことの前提認識をめぐって」『哲学論文集』51号、2015
- 庵功雄、岩田一成、筒井千絵、森篤嗣、松田真希子「「やさしい日本語」を用いたユニバーサルコミュニケーション実現のための予備的考察」『一橋大学国際教育センター紀要』1、2010
- 池田和弘『旅と遊びの英単語—こうすれば速く覚えられる!』日本実業出版社、1992
- 井上ひさし『私家版 日本語文法』新潮社、1981
- 井上史雄「公用語化の必要経費」中公新書ラクレ編集部+鈴木義里編『論争・英語が公用語になる日』中公新書ラクレ、2002
- エリオット、T・S・『詩の社会的機能』『エリオット全集 3 詩論・詩劇論』中央公論社、1971 [Eliot, T. S., *The Social Function of Poetry*, 1945]
- 沖森卓也『日本語の誕生—古代の文字と表記』吉川弘文館、2003
- カサノヴァ、ホセ、津城寛文訳『近代世界の公共宗教』玉川大学出版部、1997 [Jose Casanova, *Public Religions in the Modern World*, 1994]
- 川村二郎「翻訳の日本語」『日本語の世界15 翻訳の日本語』中央公論社、1981
- 今野真二『振仮名の歴史』集英社、2009
- 坂部恵「〈ふるまい〉の詩学」岩波書店、1997
- 志賀直哉「国語問題」『志賀直哉全集』第7巻、岩波書店、1974
- ショダンソン、ロベール、田中克彦他訳『クレオール語』白水社(文庫クセジュ)、2000 [Robert Chaudenson, *Les Creoles*, 1995]
- 白川静『漢字百話』中公新書、1978
- 鈴木孝夫『閉された言語・日本語の世界』新潮社、1975
- 鈴木孝夫『あなたは英語で戦えますか—国際英語とは自分英語である』富山房インターナショナル、2011

- 鈴木孝夫『日本の感性が世界を変える一言語生態学的文明論』新潮社、2014
- 鈴木孝夫『鈴木孝夫の曼陀羅の世界—一言語生態学への歷程』富山房インターナショナル、2015
- 鈴木孝夫、田中克彦『【対論】言語学が輝いていた時代』岩波書店、2008
- 竹内整一『やまと言葉で哲学する—「おのずから」と「みずから」のあわいで』春秋社、2012
- 竹内整一『やまと言葉で〈日本〉を思想する』春秋社、2015
- 田中克彦『国家語を超えて』筑摩書房、1989
- 田中克彦『クレオール語と日本語』岩波書店、1999
- 田中克彦『漢字が日本語をほろぼす』角川マーケティング、2011
- 築島裕「日本語の文体」『岩波講座日本語 10 文体』岩波書店、1977
- 次田香澄校訂『玉葉和歌集』岩波文庫、1944
- 津城寛文『日本の深層文化序説』玉川大学出版部、1995
- 津城寛文「日オリジナルの人文社会系キーワード」『国際日本研究紀要』8号、2016
- 中村雄二郎「日本語と共通感覚」井上ひさし編『日本語の世界10 日本語を生きる』中央公論社、1985
- 原聖「言語マイノリティ—地域的少数言語を中心に」多言語化現象研究会編『多言語社会日本—その現状と課題』三元社、2013
- ハリソン、K・デイヴィッド、川島満重子訳『亡びゆく言語を話す最後の人々』原書房、2013 [K. David Harrison, *The Last Speakers: The Quest to Save The World's Most Endangered Languages*, 2010]
- 平川祐弘『西洋人の神道観—日本人のアイデンティティを求めて』河出書房新社、2013
- フィンチ、アンドリュウ、下畑光夫、隅田英一郎「機械翻訳のための文簡易化」『情報処理学会研究報告自然言語処理』1、2005
- 藤井幸之助「多言語サービス・多言語支援」多言語化現象研究会編『多言語社会日本—その現状と課題』三元社、2013
- フト、ヴェルナー、志村恵訳『原理主義—確かさへの逃避』新教出版社、2002 [Werner Huth, *Flucht in die Geweißheit: Fundamentalismus und Moderne*, 1995]
- 船山徹『仏典はどう漢訳されたか—ストラが経典になるとき』岩波書店、2013
- フルフォード、ベンジャミン『泥棒国家の完成 *The Iron Kleptocracy: The Sun Never Rises Again*』Kobunsha Paperbacks, 2004
- フルフォード、ベンジャミン『日本がアルゼンチンタンゴを踊る日 *The Day Japan Came Crushing Down*』Kobunsha Paperbacks, 2002
- フルフォード、ベンジャミン『ヤクザ・リセッション—さらに失われる10年 *The Yakuza Recession: Another Lost Decade*』Kobunsha Paperbacks, 2003
- 松岡正剛『侘び・数寄・余白—アートにひそむ負の想像力 連塾方法日本II』春秋社、2009
- 丸山真男、加藤周一『翻訳と日本の近代』岩波新書、1998
- 水村美苗『日本語が亡びるとき—英語の世紀の中で』筑摩書房、2008
- ミュラー、マックス、津城寛文訳『人生の夕べに』春秋社、2003 [Max Muller, *Life and Religion*, 1905]
- 柳父章『翻訳を読む—異文化コミュニケーションの明暗』丸山学芸図書、1998
- 山田敏雄「和漢混淆文」『岩波講座日本語 10 文体』岩波書店、1977
- 山本有三「この本を出版するに当って—一国語に対する一つの意見—」『戦争とふたりの婦人』岩波新書、1939
- ロンゲ、ダニエル「言語接触と言語混交」多言語化現象研究会編『多言語社会日本—その現状と課題』三元社、2013
- 渡部昇一『日本語のこころ』講談社現代新書、1974
- 和辻哲郎「日本語と哲学の問題」『続日本精神史研究』『和辻哲郎全集』第4巻、岩波書店、1962